論　文

アイルランド民話と日本昔話における比較の試み

髙木　朝子 [1*]

An Attempt of Comparative Study of Irish and Japanese Folktales

Tomoko Takaki[1*]

When reading folktales, we suddenly realize that the thoughts and daily activities of the people who passed them down are deeply engraved in them. It is surprising to know that some of the Irish folktales are very similar to Japanese folktales, and I wondered if it means that people have been thinking alike since ancient times, or that they somehow made their way from Ireland, on the western edge of Europe, to Japan, on the eastern edge of Asia. In any case, it can be expected that it may be because the Japanese people's ancient way of living and thinking is similar in some respects to that of the Irish people, and that this may have influenced their stories. In this study, we would like to compare Irish and Japanese folktales concretely and consider the differences and similarities between them to approach the clarification of the question.

キーワード：民話、アイルランド、異界、オシーン、浦島太郎
Keywords：Folktales, Ireland, Otherworld, Oisín, Urashima Taro

１．序

民話を読んでいくと、それを語り継いできた人々の考えや日々の営みが深く刻み込まれていることに気づく。アイルランドの民話には日本の昔話と酷似しているものがあり、それは太古より人々の考えることは似ているということなのか、あるいはヨーロッパ西端のアイルランドからアジア東端の日本まで伝わってきたということなのかと、驚くばかりである。いずれにしても日本人の古来からの生活と考え方がアイルランドのそれと似ている部分があり、それが影響しているからではないかと予想しつつ、アイルランド民話と日本昔話を具体的に比較して、その相違点や類似点を考察することで、疑問の解明に近づけたい。

２．用語について

まず、用語について整理する。ここで扱うお話について、それらを表す用語として昔話、民話（民間説話）、伝説、口承文芸などがある。一般にそのお話の起こった時代や場所、登場する人物が実際・実在のものであるとするものが伝説（legends）で、そう特定できないお話が昔話（folktales）である。民話（folk narratives）は、この２つに世間話（gossip）を加えた３つに大別される。口承文芸（oral literature）は、さらに上位区分の総称である(1)。口承文芸では、リズムやパターンを含まない物語が民話で、そのほか民謡、語り物、唱えごと、ことわざ、なぞなぞなどと区別されている。日本語では folktales を昔話ではなく民話と訳すことが多く、著者は伝説と昔話を含む広義の意味で「民話（folktales）」という言葉を用いる。

一方、日本のお話を指す場合、「民話」よりも「昔話」の用語のほうがより親しまれているが、日本の昔話を思い浮かべるとそのほとんどには伝説の要素が多く見られる。しかし、昔話か伝説かをそれほど厳密に区別する必要は本研究にはないため、ここでは日本の「昔話」は前述の広義の「民話（folktales）」と同義であるとして用いる。

３．先行研究について

民話（あるいは昔話）がいつ頃から誕生したのかについては、三宅が「民話の歴史は、人類の言葉の歴史と同じだけさかのぼれそうである」(2)と述べているように、人類が言語を獲得してから間もなく始まったのではないかと推測される。具体的な年代について、言語学界には人類は 3 万年ないし 4 万年前に初めて音声言語を身につけたという学説があり、これに関連して稲田は「三万年、四万年前に当時の遠祖たちが共有した原感動」を語り継

[1] リベラルアーツ系
〒861-1102　熊本県合志市須屋 2659-2
Faculty of Liberal Arts
2659-2 Suya, Koshi-shi, Kumamoto, Japan 861-1102
*　Corresponding author:
E-mail address: t-takaki@kumamoto-nct.ac.jp (T. Takaki).

ぐために昔話などの説話が成立したとしている[3]。

このように何万年という時を経て民話が語り継がれてきていると推測できるが、序で述べたように、アイルランド民話と日本昔話には酷似した物語のものがいくつかある。これはアイルランドと日本に限ったことではなく、世界中の別の離れた地域同士でもよく似た話が存在する。なぜ異なる場所で類似した話が語り継がれてきたかについては、様々な手法で研究がなされてきた。

鵜野の「昔話研究の歴史[4]」を参考に整理すると、民話の国際比較研究が始まったのは19世紀初めで、ドイツの民話・伝説を収集して分析したグリム兄弟からである。彼らは異なる国や地域で類似する民話や伝説が伝承されていることに気づき、インド・ヨーロッパ語族の広がりと民話・伝説の伝播が重なるとする「インド・ヨーロッパ理論」と、民話・伝説は神話の断片であるとする「神話断片理論」を提唱した。その後、前者の理論はドイツの文献史家 T.ベンファイによって、後者の理論はイギリスの人類学者 E.B.タイラーや A.ラングによって深められたが、民話が前者のように1ヶ所で発生して伝播したのか（一元的発生伝播説）、後者のように別々の場所で発生したのか（多元的独立発生説）で両者は鋭く対立した。

それからの民話研究の手法について、主な5つの方法は次のとおりである。

3.1 歴史地理的方法（フィンランド学派）

フィンランドの K.L.クローンは「インド・ヨーロッパ理論」と「神話断片理論」の両方を批判する立場をとり、それを継承した A.アールネは、類似する民話が異なる場所で語り継がれているのは、その話には原郷があり、やがて各地に伝播していったからであるが、原郷は話によってそれぞれ異なると考えた。そして可能な限り数多くの民話を国際的に収集し、話型とモチーフを基準に比較・分類することによって、個々の原形を復元し、その発生地や伝播経路を解き明かす方法を提唱した。この「地理歴史的方法」は世界的に民話研究への影響を与え、その基準は現在も用いられている。

3.2 歴史的再構成法

19世紀後半以降の人類学者や民俗学者によって提唱された。神話や昔話のような民間説話（物語）が、その民族の世界観や宗教観、宗教儀礼や生活習俗を次の世代に伝えることを目的として創造されたと考え、民間説話はそれらが象徴的に刻み込まれた物とみなす。その説話が創造された時代の人々の世界観や宗教観、習俗等を、説話比較や文献、考古学的資料を駆使して再構成（復元）しようとする研究法が「歴史的再構成法」である。

3.3 機能論的方法

20世紀に入って新しく提唱された理論の一つで、民話の社会的機能に重点を置く。つまり、ある昔話がある特定の社会で発生し伝承されてきたのは、その話が当該社会の人々の持っている何らかの欲求を充足させる機能を果たしてきたからだと考えた。よって、この学説は話の背景にあるものに注目し、民話と社会の関係性を探っていく立場をとっている。

3.4 構造論的方法

構造論（形態学）的方法はスイスの言語学者 F.ソシュールらによって提唱され、ロシアの V.プロップやフランスの C.レヴィ＝ストロースらによって民話や神話の研究にも応用されていった。機能論的方法とは異なり、民話のテクストに注目し、その構造や形態を記号化して提示することを通して人類の普遍的な思考様式（パターン）を明らかにしようとする。つまり、昔話の類似性は、人類の普遍的な思考様式というものが存在するために生まれたと考える。

3.5 精神分析的方法

オーストリアの精神分析家 S.フロイトの精神分析的アプローチは心理学のみならず、文学や歴史などあらゆる領域に影響を及ぼした。日常生活の中で生じる葛藤や心理的抑圧に対処するため、人間は無意識的な欲求や願望を抱き象徴的に表現しようとするが、これが個人レベルでは夢や妄想となって表れ、集団レベルでは神話や昔話として表現されると考えた。構造論的方法と似ているが、思考様式パターンに着目するか、無意識ないし深層心理に着目するかが異なっている。

3.6 イデオロギー的方法

20世紀後半以降に提唱された新しい研究手法で、口承の資料よりも文字化された資料に焦点を当て、同じような内容の昔話が時代や民族（社会）によって少しずつ変化した形で記録されているのは、編著者の政治的・教育的な意図や、個人の意図を超えた時代的・社会的な要請が反映した結果であると考える。編著者の思想やその時代の社会について検討することを通して、それぞれの話に込められたメッセージやイデオロギーを明らかにしようとする研究である。

ここまで民話研究の歴史について確認してきたが、これらの手法を参考にしつつ、本研究ではアイルランド民話と日本昔話のうちで類似した話を比較し、その物語やモチーフの背景や由来、相違点やその理由などを考察する。また、稲田の言う「遠祖たちが共有した原感動」の解明に近づけるよう試みる。

４．民話の比較

ここからはアイルランド民話と日本昔話のうちで、物語がよく似ている話を 1 組提示し、その類似点と相違点について考察していく。アイルランド民話からは「ティル・ナ・ノグへ行ったオシーン[5]」、日本昔話からは「浦島太郎[6]」を取り上げて比較する。この 2 話はいずれもオシーンや浦島が異界行をする話である[7]。まず、それぞれのあらすじを提示し、類似点と相違点を整理し、民話成立の背景を確認した後、比較分析を行う。

4.1 民話のあらすじ

「ティル・ナ・ノグへ行ったオシーン」（アイルランド民話）

①若い美しい女性（金髪のニアヴという妖精）が、フィアナ騎士団の騎士オシーンに恋をする。

②ニアヴが馬に乗って浜辺に現れ、オシーンの父で騎士団長のフィンに挨拶をし、オシーンと結婚して暮らすために、彼を自分の国である西の海の彼方のティル・ナ・ノグ（常若の国）へ連れていく。

③ティル・ナ・ノグで数年間過ごしたオシーンは、故郷の父や仲間たちに再会したくなり、ニアヴにお願いして一時帰郷を許される。その際、ニアヴから「馬から絶対に降りてはならず、降りたらもうこの国には戻れない」と言い渡される。

④オシーンが馬に乗って帰郷すると、故郷はすっかり変わっており、父や仲間たちはおろか、知っている者も一人もいない。家があった場所には何もなく、道端で大きな石を動かせず困っている人たちに遭遇する。

⑤石を動かすためにオシーンが馬上から手を貸すと、誤って馬から落ち、たちまち数百年の歳をとって倒れ込む。乗っていた馬は、風のように走り去る。

「浦島太郎」（日本昔話）

①浦島太郎は、浜辺で子どもたちが亀をいじめているのを見つけると、かわいそうに思ってその亀を買い取って助け、海へ放す。

②二、三日後、釣りをしている浦島の前に亀が再び現れ、助けてもらったお礼に浦島を海中の竜宮城へ連れていく。

③竜宮城には乙姫がいて、御馳走や踊りなどで歓待されて時を過ごす。やがて、両親や家のことが心配になった浦島が帰る意思を伝えると、乙姫は別れを惜しむが、「決して蓋を開けてはならない」と言って玉手箱を土産に渡す。

④浦島が村に戻ってくると、父母や友人、家もなく、誰も知っている者はいなくなっていた。

⑤太郎は忠告を忘れて玉手箱を開けると、中から白い煙が出て、実年齢の白髪だらけの老人の姿になる。

4.2 民話の類似点と相違点

類似点として特徴的なのは、以下のような点である：

(a)異界は、海の彼方か海中にある

(b)異界では、超自然的な時間の経過がある

(c)異界では歓待され、楽園のように描写されている

(d)オシーンも浦島太郎も元の世界に帰りたくなり、申し出ると「馬から降りてはいけない」「玉手箱を開けてはいけない」という禁戒を言い渡される

(e)元の世界に戻ると数百年の時が経っていて、誰も知る者がいない

(f)禁戒が破られると、たちまち歳をとる

相違点として特徴的なのは、以下のような点である：

(g)異界へ移動する際、共にいる動物が「馬」と「亀」という違い

(h)ニアヴはこの世にやってきてオシーンを連れていくが、乙姫はこの世にはやって来ない

(i)ニアヴとオシーンは結婚するが、乙姫と浦島太郎は結婚しない

(j)オシーンは一旦帰郷しても異界（ティル・ナ・ノグ）に戻るつもりだったが、浦島太郎は竜宮に戻るつもりではなかった

4.3 民話成立の背景

「ティル・ナ・ノグへ行ったオシーン」

アイルランドの古文献（8-12 世紀頃）に残る物語は、神話物語群、アルスター物語群、フィニアン物語群、歴史物語群に大別されるが[8]、その中でもフィニアン物語群は、古文献に残される一方、人々の間でも好まれて語り継がれてきた。フィニアン物語群は、フィン・マックールを首領とする騎士団の話で、ここで紹介しているオシーンの話もこの物語群に含まれる。オシーンはフィンの息子で優れた騎士であり、母は妖精の力で鹿に姿を変えられてしまったサヴァである[9]（オシーンは子鹿の意）。この物語の時代背景は 3 世紀頃とされているが、記録は 12 世紀頃のものがほとんどである。

海の彼方にある異界に行く物語として、『ブランの航海』（8 世紀）があり[10]、ブランは様々な異界の島を旅してエリン（アイルランド）に戻るが、数百年の時が過ぎている。また、同時代、修道士の航海譚も多く残されており、訪れる異界には煌びやかな楽園の描写がある。

「浦島太郎」

現在私たちがよく知る上記の物語は、明治 37 年からの

国定教科書に掲載された話によるところが大きい。しかし、物語そのものの歴史は古く、『万葉集』（7-8 世紀）、『日本書紀[11]』（720 年）、および『丹後国風土記逸文』（8 世紀）の「浦島子伝説」が原型である。『日本書紀』では、浦島子が行くのは竜宮ではなく蓬莱（とこよのくに）であった。蓬莱山は中国における不老不死の理想郷であり、道教の中核にある神仙思想の影響を受けているといえる。

その後、室町時代の短編物語集『御伽草子』に採話された頃から「浦島太郎」となり、竜宮、乙姫（それまでは蓬莱の女［おとめ］、海若［わたつみ］の神の女［おとめ］）、玉手箱（それまでは玉匣［くしげ］）のモチーフが登場した。また、国定教科書に載る前までは、亀は乙姫（蓬莱の女）の化身であった。

国定教科書への掲載は、国威高揚のため、国語を民族的なものと結びつけて説明し、国語を民族の言語、国民の魂の宿るものとして強調する一貫として、桃太郎などの五大物語とともに採用された。鬼退治に出かける桃太郎[12]（他国を凌駕し侵攻する強い日本のイメージに使われた）ほどではないものの、軍国主義的な思想を意識づけるための一旦を担わされていた[13]。

4.4 比較分析

類似点(a)について、アイルランド民話では「西の海の彼方」となっているが、海の中の世界となっている類話も多い。西は陽が沈む方角であり、昼を「生」、夜を「死」と捉えて、死の世界と異界のイメージとの共通性が考えられる。なぜ海なのかということについては、アイルランド民話でも日本昔話でもこの話が語り継がれた地域が海岸沿いで、生活に密着した場所であったということが最大の理由であろう。また、生活の糧を得る場所でもあり、自然の脅威によって命を奪われる場所でもあったであろう。その神性への畏敬の念が、この海の異界のイメージに大きく影響していることに疑いの余地はない。また、海を旅するということは、現代では考えられないほど時間がかかり、危険とも隣り合わせだった。アイルランドでは、漁師だけではなく宣教師や修道士たちが、教えを広め修行をする場を探すため船で旅に出ており、数々の航海譚や冒険譚が残されているほどである。日本でも、漁師だけでなく大陸に渡って交易を行う人々がいて、その長く危険で且つ未知の旅路が、異界のイメージと繋がったのではないかと想像できる。

(b)について、アイルランド民話の引用には何日や何年という数字は出てきていないが、ティル・ナ・ノグで 3 年過ごすと元の世界では 300 年経っていたという数字が類話に多い。一方、日本昔話の引用にも具体的な数字はないが、万葉集では 3 年過ごした後は具体的数字はなし、室町時代の御伽草子では 3 年で 700 年、丹後国風土記や明治以降の国定教科書では3年で300年とされている[14]。3 という数字は縁起がいい数字としてアイルランドでは好まれる傾向にあるが、日本昔話の一部とは年数まで一致するのは興味深い。時間の超越に関しては、先に述べたように、アイルランドでは『ブランの航海』のようなより古い記録の中の物語でも、数年の旅のあとで戻ると数百年経っていたというモチーフのものは存在するので、古くから口承の中にあるモチーフだと考えられる。

(c)の異界が楽園のように描写されることについて、アイルランド民話でも日本昔話でも共通して、この海の異界では歳を取らず、ご馳走でもてなされて、美しく楽しいもので満たされている。それはティル・ナ・ノグ（常若の国）や蓬莱山（とこよのくに：日本書記）、常世辺（とこよへ：万葉集）および海若の神の女（わたつみのかみのおとめ：万葉集）という言葉にも表れている。アイルランド神話では、海の異界は海神マナナン・マクリールの国であり、神々がミレー族という人間との戦いに敗れた後、地上は人間に譲り、地下や海中に住んで妖精となったとされており、神々や妖精の煌びやかさや不死のイメージもこれに加担しているのではないかと思われる。日本昔話のほうでは、かつて竜宮ではなく蓬莱だったことから、中国の神仙思想の影響が考えられる。神仙思想では、前述のように蓬莱山は不老不死の理想郷である。

(d)について、アイルランド民話にも日本昔話にも禁戒を破るモチーフは多いが、特に日本昔話には「決して見てはいけない」（鶴の恩返し）、「決して話してはいけない」（雪女）など禁戒を言い渡されるが破ってしまうモチーフは多く存在する。アイルランドの古民話にもゲッシュという誓約・禁戒があり、それは約束事であったり最後の運命を予言するものであったりして、それから逃れることはできない。そのほか、妖精が禁戒を条件に人と結婚する話などは多い。アイルランド民話では、禁戒を守ろうとするが偶発的に破るか、不注意に破るかのパターンが多いが、日本昔話では、してはいけないと言われるとしたくなる人間の心理が表れたような印象である。稲田によると、「決してみてはいけませんよ」と念を押された場所や中身を主人公が見てしまうというモチーフは、昔話の様式論における「先取りの技法」と呼ばれ、聞き手に次に起こることを予想させるためのレトリックの一つとされている[15]。聞き手に次に起こることを予想させるという点では、アイルランド民話にも日本昔話にも同

じ意図が感じられる。

(e)の時間の超自然的な経過に関しては、すでに(b)のところで考察している。

(f)について、禁戒がどのように破られるかについては(d)で述べた。禁戒が破られた後について考察すると、アイルランド民話では「決して馬から降りてはいけない」と言われていたものの、人助けをしていたら鎧が切れて落馬してしまい、それから馬は風のように駆け去り、オシーンはたちまち白髪でしわしわの老人となって倒れ込む。馬に乗っていることでオシーンはまだ異界にいたが、地面に足をつけることが異界から出るということを意味している。一方、日本昔話では「決して開けてはならない」玉手箱を開けると、中から白い煙が出て、実年齢の白髪だらけの老人の姿になる。浦島がまとっていた異界のシールドが白い煙によって剥がれ落ちたという感じであろうが、白い煙が一種の異界との境界を形成するものと言える。異界の時の流れに対して、元の世界は 100 倍速く流れるので、一気にその分の歳を取って倒れ込むところはアイルランド民話も日本昔話も同じである。しかし、アイルランド民話のほうは、馬から降りたら異界に再び来ることはできないという注意喚起に過ぎないが、日本昔話のほうは、なぜその玉手箱を渡す必要があったのかという疑問が残る。これについては様々な解釈があるが、早川によると、「丹後国風土記」では、年老いた浦島太郎は鶴に化身して蓬莱山へ向かい、後に亀とともに浦島明神として祭られたという、悲劇的ではない結末になっている[16]。口承の過程や、文字記録に残される際の意図的な改変がこの悲劇的結末にさせてしまったのかもしれないが、ここでは比較を目的としているため、さらに深い解釈については別の機会にしたい。

続いて、これ以降は相違点について考察する。相違点(g)について、アイルランド民話では異界に行く時に馬に乗っており、日本昔話では亀に乗っている。動物に乗っているという点は共通しているが、動物の種類が異なる。亀は海辺にいて、しかも異界の不死・長寿のイメージにも通じる動物の一つかもしれないが、馬は海とは関係がない。ここでは、アイルランドの場合、妖精と馬との強い関係性が考えられる。アイルランド民話では妖精はしばしば馬に乗っており、妖精の騎馬行進（fairy cavalcade）という言葉もある。これは恐らく神話の神々や、その元になったであろう先住民のイメージから来ていると思われる。アイルランド民話で海に現れて異界と往来する動物としてはアザラシがいて、アザラシは妖精が化身した姿である。しかし、馬は妖精が化身した姿ではない。日本昔話の亀は、室町の御伽草子の頃までは乙姫（蓬莱の乙女）の化身であったが、明治の国定教科書からは竜宮の使いになってしまっている。子どもに読ませるものとして、あまり男女の姿を強調したくない意図があったのではないかと思われる。

相違点(h)について、国定教科書では乙姫は浜辺に現れないのだが、先ほど述べたように、室町の御伽草子までは亀は乙姫の化身であり、浦島によって吊り上げられ、海に放された後再び浦島の元に来る。また、御伽草子では乙姫が浦島に求婚しており、アイルランド民話のニアヴがオシーンに対してしたことと同じである。

(i)についても、さきほど(h)で述べたように、国定教科書の前までは乙姫と浦島は結婚していた。それを国定教科書では触れなかったのは、相違点(g)で述べたように子どもへの教育用物語としての改変があったと思われる。

(j)についても、直前で述べた結婚が関係してくる。オシーンは故郷の家族や仲間が懐かしく恋しく感じ、一旦帰郷したいと考えるが、夫婦関係が破綻したわけではないので、妻ニアヴのいる異界に戻るつもりでいた。一方、浦島のほうは竜宮城での生活に飽きて帰りたくなる、または両親や家が気になるなどの理由で帰ることになるが、またすぐに戻ってくるつもりがあるという描写は見当たらない。しかし、万葉集では、「常世辺に また帰り来て 今のごと 逢わむとならば」この匣（くしげ）を開けてはならないと言っており、匣を開けなければまた会えるということになる。国定教科書で男女のことを曖昧に表現される前は、浦島のほうも乙姫と別れるつもりはなかったようである。

５．結

アイルランド民話と日本昔話のよく似た物語で、とりわけ特徴的な異界が登場する話を比較し、その類似点や相違点について検討することにより、なぜ離れた地域で語り継がれてきた民話同士が似ているのかについて解明する糸口になればという思いで分析してきた。２つの民話に共通する１つのルーツがあるのかどうかまでは導くことができなかったが、海に対する畏怖の念、異界のイメージ（時間の超自然的経過、楽園感）については、伝播ではないが類似した感覚や信仰を、アイルランドと日本で持っていると考えられる。また、私たちが現在よく知っている浦島太郎の物語は明治以降の国定教科書に掲載された話であり、それ以前の話を調べるとさらにアイルランド民話のオシーンの話に類似する結果となった。この浦島太郎の話の類似性について、中田は早くから浦島

伝説の南方（メラネシア・インドネシア）からの伝播説をとっており[17]、稲田はアジアをはじめヨーロッパにも、主人公が妖精の国などの異界から帰還するが一気に老化してしまうというモチーフを含む話が多く、多岐にわたる分野からのアプローチがなされているとしている[18]。本論文でも、いかにアイルランドと日本の間で類似した生活環境や信仰が存在していたとしても、それだけでは証明できないような類似性が多く見られた。今後は他の類似した民話についても比較分析することにより、世界の民話の類似性について解明の一助となるよう考察を続けたい。

（令和 4 年 9 月 11 日受付）
（令和 4 年 11 月 4 日受理）

参考文献

(1) 鵜野祐介:「昔話の人間学−いのちとたましいの伝え方」, pp.viii-ix, なかにしや出版 (2015).
(2) 三宅忠明 :「アイルランドの民話と伝説」, p.240, 大修館書店 (1978).
(3) 稲田浩二編 :「世界昔話ハンドブック」, pp.12-13, 三省堂 (2004).
(4) 鵜野祐介:「(3)昔話研究の歴史-異なる場所で似ている話が語り継がれてきたのは何故か」, 稲田浩二編 :「世界昔話ハンドブック」, pp.266-73, 三省堂 (2004).
(5) MacLennan, Gordon W.: “How Oisín went to Tír na hÓige,” *Seanchas Annie Bhán: The Lore of Annie Bhán*, pp.87-105, The Seanchas Annie Bhán Publication Committee (1998). このオシーンの異界行の類話は, アールネ・トマソンの国際民話話型「AT470 英雄の不死の国訪問（The Hero Visits the Land of the Immortals）」にあたるとされている. Antti Aarne, Stith Thompson: *The Types of the Folktale*, Folklore Fellows’ Communications (1964).
(6) 中嶋真弓 :「小学校国語教科書「浦島太郎」採録の変遷」, 愛知淑徳大学論文集―文学部・文学研究科篇, 第 35 号, p.59 (2010).
(7) 本研究における「異界」の定義については以下の報告に基づいている. 髙木朝子 :「アルランドおよびイギリスの伝承文学における「異界」の定義について」, 熊本高等専門学校研究紀要, 第 13 号, pp.81-84 (2021).
(8) Dillon, Myles: *Early Irish Literature*, U of Chicago P (1948).
(9) 井村君江:「ケルトの神話」, p.230, 筑摩書房 (2002).
(10) 松村賢一 :「異界と海界の彼方」,中央大学人文科学研究所編 :「ケルト　生と死の変容」, pp.5-6,中央大学出版部 (1996).
(11) 稲田浩二、稲田和子編 :「日本昔話ハンドブック」, pp.28-29, 三省堂 (2001).
(12) 鵜野によると, 桃太郎は「真珠湾攻撃をテーマにした一九四三年公開の日本初の長編アニメ「桃太郎の海鷲」に代表されるように, かつてこのキャラクターが, 「鬼畜米兵」を打倒し, 「西洋列強によって荒廃した支那」を支配する使命を帯びた「皇国男子」の象徴として用いられた」. (1)に同書, p.82.
(13) (6)に同書, pp.73-76.
(14) (6)に同書, p.70.
(15) (6)に同書, pp.103-04 .
(16) 早川芳江 :「明治年間の「浦島」たち−「小説」と「戯曲」と「児童文学」」, 東洋大学「エコ・フィロソフィ」研究, Vol.12, p.43 (2017).
(17) 中田千畝 :「浦島と羽衣」, pp.65-70, 坂本書店 (1926).
(18) (11)に同書, p.81.